やっと話せるようになって十年余

高橋久子　下野市

今から72年前、一九四五年（昭和20年）、広島で原子爆弾による被爆をしました。女学校1年生（現在の中学1年生）、12歳の時でした。

●戦時下の状況

その当時日本は、第二次世界大戦中で、アメリカ、イギリスと戦争状態にあり、戦局も押し迫っていました。ラジオのニュースは毎日猶予されない出来事ばかり報じていました。東京をはじめ、国内の主要都市はアメリカ軍B29の空爆を受け、宇都宮市とか、小金井の辺りも被害を報じていました。

広島市は太田川とその支流によるデルタ地帯にあり、瀬戸内海に面した気候温暖で、地震、台風などの自然災害の少ない住みよい所です。私の家はこの牛田町、爆心地から2㌔の場所です。

私の両親は広島市の北東60㌔の三次（みよし）市三次町が出身地です。父は芸備銀行三次支店（現在の広島銀行）に勤務していて、その後広島市内の支店に移りました。私は広島市牛田町で生まれ、兄2人と妹の4人兄弟は父母の慈愛に包まれて幸せな日々を過ごしていました。昭和20年3月、白鳥小学校を卒業し、広島県立第二高等女学校に入学、希望に燃えて元気いっぱいでした。毎日牛田から宇品の女学校へ救急袋と学用品、防空頭巾をXに肩にかけ、1時間歩いて通いました。当時は乗り物には乗らず、学生は全員歩いて通うことになっていました。

この頃の学校は、戦争中のため夏休みはほとんどなく、中学生以上の学生、生徒は連日工場などに動員され、現場で働いていました。また、国民学校と呼ばれていた小学校では3～6年生の子どもたちを空爆に遭わせないため、お寺に行ったり、縁戚を訪ねたりして農山村への学童疎開が行われました。昭和20年4月、妹も親元を離れて疎開しました。そのため、市内には1、2年生の低学年の児童だけが残っていました。

●運命のあの日

昭和20年8月6日、広島市内の上空は雲一つなく、よく晴れ渡っていました。

父の出勤先（紙屋町）と方向が一緒なので、いつものように自転車の後ろに乗せてもらい、7時頃、母に見送られて家を出ました。神田橋の近くで、「頑張りなさい」と父に励まされ、手を振って別れました（父と一生の別れともわからず）。父は神田橋を渡り紙屋町の方向に、私は太田川に添い広島駅北裏の、東練兵場に行きました。

私たち1年生も勤労報国隊員として学業を放棄し動員され、陸軍東練兵場で軍用食料としてのサツマイモ畑の草取り作業をすることになっていました。1年生100名が8時に作業を始めました。2年生の50名は、交代のため、その時間には集まらず、山の陰にいました。

8時15分、まっ黄色の光線と、熱く痛いすさまじい風が、ゴーッと体を通って行きました。目を押さえ、耳をふさぐ体勢になったまま、しばらく気絶していました。だんだん周りが生臭くなり、皆の泣き叫ぶ声で私は目が覚め、前にいらした先生が「作業は終わり、立てる人は立ちなさい」と言われました。

立とうとすると、手の皮が焼けただれてぶら下がり、白い体操服だけが体に残っていました。黒いモンペは熱を通しやすい布でできていました。そのため左足はほとんど焼けただれ、立つとパンツが少し見えるほどです。「お母さん！」「先生！」と皆の叫び声ですさまじい状態でした。

後ろの山の方に避難しようと、「動きましょう」と言われましたが、動けない人もいました。先生は腫れ上がった顔で目をギラギラさせながら、気丈にも現地解散の命令を下ろされました。先生は起き上がった時には、仁王様のような形相で、顔

が腫れあがっていましたが、それでも気丈にも解散の命令を出されたのです。あの頃、私たちはすべて命令で動いていました。

上から2年生の人たち50人が降りてきて、「牛田の方に帰る人いらっしゃる?」と言って、2年生のお姉さん方が私を連れて帰る方向に進み出しました。

市内中心部からの被爆者が入ってきました。みなひどい火傷です。兵隊さんは帽子のあとだけが残り、手の皮はぶら下がり、足は引きずり、血まみれで、いま思い出すだけでもぞっとします。

●目撃した惨状―絵空事ではない現実

救護所ができたのは2時間後ぐらいで、市内から裸の子どもや、乳飲み子を抱いた血まみれのお母さんが、助けを求めてころぶように救護所に集まってきます。私もその救護所に向かいました。なぜかというと火傷した足が腫れて水ぶくれになり、ちょっと歩くとドボン、ドボン、1升くらいの水が溜まっている。手の皮は熱で皮がむけてぶら下がって、それがだんだん時間が経つにつれて、大きな水泡になり、歩くとドボドボと音がしました。手の茶色い皮も全部ぶら下がっています。しかし、周りの人々のあまりの惨状に救護所には入れませんでした。

お母さんと乳飲み子が、半身半裸で、赤ちゃんもお乳がほしいだろうに、赤ちゃんの体全体がもう団子みたいに、手も足もいっしょにくっついて団子になって、そして亡くなっていく。そのうち警戒警報が鳴り、アメリカのB29が結果を見にやってきました。「白い服を着ている人は目立つから隠れていろ」と兵隊さんが叫びまわっていました。

私は山手に向かいましたが、笹が火傷した皮膚を刺激して痛くて仕方ありません。そばに小川があり、板橋の所にかがみこみ水を飲みました。「生水は飲まないで」「眠ってはだめ」との先生の叫び声が聞こえましたが、我慢できませんでした。そのまま警報が解除になるまで小川の中でしゃがんでいました。しばらくして黒い雨が降ってきましたが、そのときはすぐに止みました。帰らなくては、との意識で牛田の方向に向かいましたが、意識も体も他人のようになり、歩いてはしゃがんで、を繰り返していました。近所まで来ると、あ る2年生のお父さんが、娘の安否を気遣い途中まで迎えに来られていました。ご自分の娘の無事を確認された後、私の姿を見て牛田まで背負ってくださいました。進む道の左側に流れている太田川では着の身着のままで流されている人の姿を見ました。ほとんどは死体のようで、熱さに耐えられず川に飛び込んだのでしょう。道路にも裸に近い、息絶え絶えの人が寝転んで手を差し伸べているのです。「水を下さい」「水を下さい」――本当にこの世の地獄でした。

●やっと帰り着いたが、家がない

やっと私が母の両手に抱かれたのは夕方でした。朝7時に家を出て、帰るまで10時間もたっていました。帰ったものの、家は全焼してなくなり、周りも焼野原です。私の姿を見て母親は涙し、火傷した皮膚をさすり、「どうして? どうして?」と言いながらモンペの腰のひもを歯で切ってくれました。兄が私を探すため、宇品の学校や東練兵場に行ったそうですが、私が見当たらず、家に帰ると家はなく、私はこういう状態で、兄は肩を落としていました。父は以前、銀行の地下室はいちばん安全だから、何かあったらここに来なさい、と家族に言っていました。しかし原爆では、普通の爆弾とはちょっと事情が違います。爆心地に近い銀行には近寄れず、熱さと死傷者の重なりは地獄を見るようだった、と兄は震えて話していました。

その夜は太田川沿いに、川向こうでは一晩中パチパチと建物や樹木の燃える音が続き、空は赤い太陽が沈まないように薄明るく、生暖かい夜でした。この街道沿いは全部家が焼けました。

それにしても、どこに爆弾が落ちたんだろうか、と思いました。焼夷弾が落ちたり、火の中に飛び込めば火傷もするが、手や足がなぜ焼けたのか、当時の常識では考え付きませんでした。夜も町の

焼ける音しか聞こえず、「どうして？　どうして？」と思い続けながらうとうととしました。

●寝たきりの３ヵ月

数日後、それは新型爆弾だったと噂され、ピカドンと言われるようになりました。翌日、兄と母が焼け残った板で戸板を作り、そこに私を寝かせて三次に引き上げることにしました。広島駅から芸備線を２時間ぐらいで三次に行けますが、駅が焼けて使えません。それで、私を戸板に乗せたまま、母と兄とが歩いて山越えし、やっと、芸備線の戸坂（へさか）駅から汽車に乗れました。列車の窓を開けて、戸板ごと無理やり私を押し込んでもらったのです。車内には多くの負傷者が集まっていました。

母の実家は旅館で、すでに私の妹が疎開していました。旅館というのはぜいたく業に思われていたので戦時中は旅館業ができず、その代わり傷痍軍人を５、６人引き受けるようにと、国からの命令でした。そのため、その傷痍軍人を診るために軍医さんが来てくれていました。その軍医さんが私を診て「これはかわいそうに」とぶら下がった皮膚や、歩けばドボドボという水泡の手当てをしてくださいました。「よくここまで帰って来たね」と言われました。それを聞いて急に涙が出て止まりませんでした。

父の安否はわからず、当時三次から広島まで出にくかったのですが、それでも兄が２、３日おきに父を探しに行っていました。銀行の鉄筋が焼けているので、防空頭巾に水をかけ、それをかぶって遺体を探したそうです。そこには２、３百人の人がいたはずで、見分けのつかない死体が山積みになっていたそうです。太い柱のそばにあった父の机のそば辺りで「岩佐」（私の旧姓は岩佐といいます）と掘った印鑑が目に入り、兄はその周りの骨をハンカチで包み、８月15日に持って帰ってきました。軽石のようになった骨を見ながら、父は亡くなったと確信しました。

敗戦後、軍医さんもいなくなり、兄が私を医者に連れて行こうとしましたが、まだ皮膚ができていないので痛くて動けず、赤チン（注）を付けるだけの治療でひたすら横になっていました。当時は外科の医者がありません。傷は化膿しハエがたかるとウジが湧くので蚊帳をつってもらい、布団の上に油紙を引いて四六時中伏せっていました。膿がたまるので腕の下に枕を引き洗面器で膿を受けていました。そのうち手が反対に反ってしまったので、次にマッサージが始まりました。母は傷の手当をしながら「こんな体にして、可愛そうに、ごめんね、許してね」と涙しました。「これは戦争のせいでお母さんのせいじゃない、残酷な原爆だよ」と、幾度か母の暖かな手を握りました。戦争への怒りは母との会話でよく話題にしていました。

●体の不調といわれのない差別

両足でちゃんと立てるようになったのは３ヵ月過ぎてからです。12月中旬、広島県立三次高等女学校に転校しましたが、一人では行けず、兄が初めの10日間ぐらい付き添ってくれました。２年ぐらい体育の授業には出ることができません。当時橙色のろうそくを手に張り付けたように赤みを帯びたケロイドに、隣の席の人は気持ち悪がりました。手や足は隠すことができません。学校内では被爆した人はいましたが、火傷した人はいませんでした。スポーツマンの私だったのに、それ以来体育もできなくなり、悲しかったです。教科書がないので近所の人に借り、書き写しました。鉛筆もノートも近所の人にいただき、とにかく意地になって勉強しました。

夢多い青春時代に、ピンク色にひきつったケロイドにどれほど涙したことかわかりません。その頃の私は生まれたばかりのヒヨコのように弱々しく、今にも崩れそうだったと、後日の学友の話です。私は、私が死んで父が生き残ってくれたら、どれだけ家族が平和に過ごせたかと思います。

卒業後、母を手助けしようと地元の企業に勤めました。三次という所は周りはずっと山で木材が豊富です。その木材を貨車に積んで集積所に運ぶ。その木材計算事務をやっていました。そろばんを

はじきますので、首を前に傾けます。すると周りの男性から「首が汚れているから洗ってきなさい」と言われました。「そうですね」と言いました。「本当は火傷の痕です」と言えないで、襟のある服しか着られず隠してきました。

被爆して10年くらいはいろいろありました。皮膚は出来ましたが、ケロイドの痕はかゆくて、かゆくて熟睡ができず、妹に掻いてもらったりしていました。結婚して広島市内に出ましたが、妊娠するまで貧血で紫色の斑点が出ました。50歳で癌を予防して子宮を摘出しました。癌になる要素があるという事でした。他人より早めに病気になる感じです。体力もなく、風邪をひくと他の人より治りにくかったりもします。また、火傷の痕には毛穴がないため汗が出ない反面、顔や首に流れるように汗が出る発汗作用障害があります。72年たった現在、火傷の色は薄くなり、指や腕の曲がりもだいぶ柔らかくなりましたが、今でも夏は、いくら暑くても、袖なしの服は着ません。半袖でなく七分袖です。これは火傷を隠すためです。幸い爆心地に入っていないことで、今の健康があると思っています。父を探した兄は被爆地5㌔で無傷でしたが、爆心地で父の骨を探し歩き回ったので、2年後白血病になり入院生活を過ごしました。

三次に引き上げたことが良い結果になりましたが、今でも健康診断は欠かせません。公的に適切な医療対策が始まったのは被爆後12年たった一九五七年からです。それまでは占領下に置かれていたので、原爆の話は表立ってできなかったのです。一九五七年から被爆者手帳が交付されて、健康診断など適切な医療対策が始まりました（一九五二年までは連合国司令部（GHQ）の占領が終わるまで原爆被害の報道や発表は抑えられていました）。五六年に被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が長崎で初めて形成されました。

●原子爆弾のこと

広島市の中心に相生橋があり、ここをめがけて原子爆弾を落とす予定でしたが、横にずれて現在の原爆ドーム（広島産業奨励館）の上空５８０㍍で原子爆弾が爆発しました。8時15分、爆発と同時に太陽の9倍の明るさの火の玉により、強い熱線と光線と放射線が四方に放出されました。熱によって周りの空気が大きくふくらみ、爆風となって広がりました。これはキノコ雲と呼ばれています。この爆発のエネルギーは35％が熱線で、50％の爆風、15％が放射線となり、大きな被害を与えました。爆発した時の温度は1万℃にもなり、その強力な熱線は、四方八方のあらゆるものに被害を与えました。

爆心地では3～4千℃の熱線を受け、1㌔の屋外にいた人は焼き尽くされ、ほとんどの人が死にました。3.5㌔離れた人でさえ火傷を負いました。私は2㌔のところで被爆しました。手も足も大火傷して、今でもケロイド状態の痕が残っています。

通常爆弾と違う原爆の真の残酷さは、大量の放射線を放出して、広範囲の生態に深刻な影響を与え続けるところにあります。目に見えない大量の放射線が放出され、また核分裂の際に生じた放射性物質の破片が黒い雨となって地上に雨として落ちてきます。それが直接野菜や果物にかかり、土に混じって農作物が被害を受け、結局体内まで循環します。二〇一一年、福島でも原発事故によってそういう事が起こりましたね。

現在各国が保有しているのは、広島原爆の4千倍の威力を持つ水素爆弾です。72年前は、広島・長崎に投下された2発と実験に使った3発しかありませんでしたが、今はその何十倍も威力のある核兵器が3万発もあって、地球のどこかで核兵器が使われれば、多くの人は殺され、環境は破壊され、どこに住んでいても放射線の影響を受けることは明らかです。大きな戦争が起きれば核が使われます。核を使わせない永久平和を守ってほしいものです。

●絶対に忘れない

栃木県内のある会合でのこと、出身地が広島だと言いますと、「原子爆弾が落ちた時は大変だっ

たでしょう、でも、もう忘れているでしょうね」と言われました。とんでもないと思いました。こんなに遠く離れていると広島の惨状は伝わっていないのだ、とすごくショックを受けました。毎朝、傷跡を眺め、一生これと付き合わなければならないと思っているのに、なぜそんなことを言われるのか…知らない人には仕方ありません。被爆者の烙印を押されている私は、1日たりとも当時の光景が頭から離れることはありません。被爆者は大なり、小なり苦しみに耐えて、なお、今まで前向きに生きているのです。

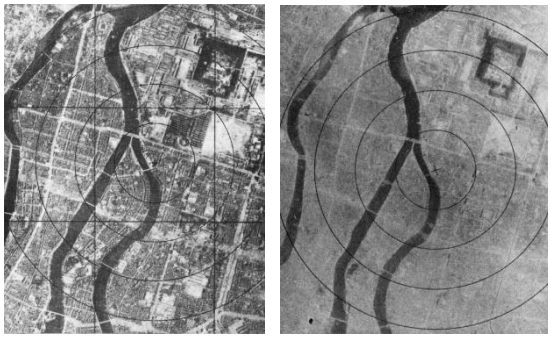
70歳まで、あちこち主人の転勤で移動しましたが、被爆者であることを絶対に話しませんでした。隠し通してきました。

被爆者の申請が出してありますので、広島資料館からある時、手紙が来ました。感想文を書いてくれと頼まれ、それを読んだ資料館の方がわざわざ見えて、いろいろ質問されました。その一冊のテープは記録として今、その資料館にあります。そのあたりから、戦争の悲惨さを徐々に話していきたいと思い立ち、72歳の時、初めて被爆体験を話すようになりました。

●広島に行って平和を学んでほしい

最後に、日本は72年にわたって平和を維持してきましたが、地球全体を見渡しますと毎日どこかで戦争が起きています。人種間の争い、宗教上の争い、資源の奪い合いなど、とどまることはありません。誠に悲しいことです。戦争は常に弱いものが犠牲になるのです。もめ事はあくまでも話し合いで接し、その経緯を後世に世界の世論に訴えていけば何とか解決されるものと信じます。広島に行かれることがありましたら、今の広島の美しい町並みは、多くの屍の上にあることを忘れないでください。二〇一八年の7月にリニューアル完成予定の資料館では死臭を重ねて見てください。本当の戦争のあとを修学してほしいと思います。

毎年8月6日、テレビで平和記念式典が放映されます。広島市長の平和宣言もさることながら、子供代表の平和の誓いには心を打たれます。夏休み中ですので、テレビを見ながら平和についてご家族で話し合ってほしいと思います。70年の式典には私も栃木県の遺族代表として参列させていただき、皆さんと一緒に平和の祈りと犠牲になられた方々の冥福をお祈りしました。



原爆投下前（左）投下直後（右）の広島市

太田川の分岐の相生橋を目標としたが、実際の爆心は東南にずれた。すっかり町が消えている。（写真：ウィキメディア・コモンズ）

原爆の子の像について、ご存知でしょうか。2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが元気に明るい子に成長しましたが、小学6年生で白血病にかかって入院、全快を祈って千羽鶴を折り続けていましたが、中学1年生、12歳で亡くなりました。これがきっかけとなって原爆で亡くなった子供たちのための慰霊碑が一九五八年5月5日、子どもの日に完成、除幕されました。高さ9㍍のブロンズ像です。広島市民の努力によりできたものです。「これはぼくらの叫びです　これは私たちの祈りです　世界に平和をきずくための」という碑文が刻まれています。塔の内部には、湯川秀樹博士の筆による「千羽鶴」「地に空に平和」の文字が刻まれた鐘が吊るされています。

そのまわりにガラス張りのブースがあり、各地からの千羽鶴が吊るされます。一つひとつ千羽鶴を折れば病気が治るの、禎子さんはそう言いながら亡くなっていきました。

平和な日本の中で勉強している皆さんは、私のように、一生懸命勉強や運動に励んで、相手を思

いやる度量の大きい立派な大人になってください。そして原爆の惨状を後世に伝えてください。

今年も8月に入ると、新聞やテレビなどで大きく、数多く報道されました。新たに戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさや、そして平和な今を忘れないようにと6日は気持ちを引き締めた一日でした。

後期高齢者の私にとって今なすべきことは、あの広島での惨状を、そして戦争の恐ろしさを一人でも多くの方々に伝えることが役目だと思っています。原爆は天災ではなく、人の手により落とした爆弾による悲劇なのです。私も体に消えない戦争の傷痕と不幸をバネにして、宿命に負けず地域社会に少しでも役に立てればと思っております。

注：赤チン
マーキュロクロムの水溶液。傷の消毒に使われる薬。色が赤いため俗に〈赤チン〉ともいわれた。製造過程で水銀が発生するので、日本では1973年頃に製造中止になったが、一般家庭では傷薬として常備してあった。